

申請者:松井 剛

論文題目 消費と『自己実現』:消費社会の進歩主義的理解の歴史的再検討

審査員 沼上 幹
伊丹敬之
栗原史郎

1. 本論文は、消費社会の進歩主義的理解が1970年頃から現在に至るまで一貫して日本のマネジャーリアル・マーケティングの世界に登場し続けてきたことを豊富な資料を駆使して示し、その進歩主義的理解の論拠の薄弱さを明らかにし、それにも拘わらず何故これほどに長い期間にわたって進歩主義的理解が存続し続けてきたのかを考察している。進歩主義的理解とは、より豊かで賢明になり続けている消費者が、ますます商品の機能よりも象徴や記号を消費するようになってきた、と考えるスタンスである。

2. 本論文の評価できる点は次の3点である。

(1)まず第1に、資料として約300件、理論的なレビューを含めれば合計約450件にも達する膨大な文献資料を処理し、ひとつの大きな流れにまとめ上げている点である。これほど膨大な資料を使いながら、大局的な流れを構成できている点は高く評価できると思われる。

(2)第2に、進歩主義的理解の問題点を丹念に指摘すると共に、それがこれほど長い期間にわたって存続し続けてきた理由として、理論を売買する市場のようなものが存在するのではないか、という仮説を示し、その理論市場のメカニズムを展開している点である。

(3)第3に、マーケティング研究の基礎学問的な源流までさかのぼり、心理学や社会学、経済学の文献とマーケティングの言説との関係を明らかにしている点である。

3. 本論文の問題点と残された課題としては以下の3点をしきりしておく。

(1)やや学術的な傾向が強く、必ずしも主張そのものを展開する上で必要不可欠とは言えないような記述があり、冗長に感じられる部分がある。あえて切るという作業がもう少し必要だったように思われる。

(2)進歩主義的理解や理論市場などの概念に関しては、さらなる展開の余地が残されているように思われる。まだ十分に展開されていない点が残念であると共に、今後の研究に期待がもたれる。

(3)さまざまな箇所ですら若干断定しすぎる傾向が見られる点である。もう少し断点を控え、バランスのとれた記述をとるべきだったように思われる。

4. 本論文には上のような課題も残されているけれども、その貢献は十分にこれらの課題・問題を上回っている。よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせて考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第4条第1項の規定に準じた取り扱いにより一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。